



この人に 聞く

「臨床血液」は会誌としての役割だけではなく、若手の医療従事者の教育ツールとして重要な役割を果たしている。「この人に聞く」では、血液学の発展に寄与した偉大な先生方に貴重な話を伺う。今回は第79回日本血液学会学術集會会長の木崎昌弘先生に語っていただいた。

進行役＝小松則夫
順天堂大学医学部内科学血液学講座教授

小松 今日は第79回日本血液学会学術集會を主催された木崎昌弘先生にお話をうかがいます。今回は史上最高の6,800名を超える参加者があったと聞いておりますが。

木崎 6,874名です。本当にたくさんの方にご参加いただきました。ありがとうございました。

小松 木崎先生らしい素晴らしい学会だったと思います。様々な工夫と各所に先生の細やかな配慮がなされた学会であったと心から感じております。

木崎 会長に指名していただいたのが3年前の2014年です。その後、実質的には2年半ぐらいかけて準備をしましました。これだけ大規模の学会となると、限らない苦勞がありました。まず、学術集會ですから学問的レベルを落とさないように、学問の進化についていかねばならないという点が第一です。それから、会員の皆さんが来られたときに、思い出になったとか楽しかったと思返していただけるような学会にしたいとずっと思っていたので、そこをどのように構築していくかなど、いろいろなことを考えましたね。苦勞といえば苦勞でしたけど、今振り返ると何もかもが楽しかったなあと思いますね。

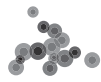
小松 今回の学術集會はプログラムの内容はもちろん素晴らしかったのですが、オリジナルのコングレスバッグをはじめ日野皓正さんの演奏、またシエナ・ウインド・オーケストラによる吹奏楽のオープニングセレモニーなどが強く印象に残っております。木崎先生は音楽がお好きだから、キーコンセプトとして音楽は重要だったのではないですか。

木崎 よくぞ聞いてくださいました。この学術集會で私が重要視したのは、いかに会長色を出すかということでした。血液学会はプログラム委員会がしっかり機能しているので、シンポジウムなどはプログラム委員会主導で構築されます。会長の色をどこで出そうと考えたとき、僕は音楽が好きなので、学術集會に音楽を取り入れたいと思ったんです。音楽には人を癒す力があります。医療とある意味通じるところもあるかもしれない。音楽、しかも一流の音楽を学術集會に導入したいと強く感じていたので、以前、慶應と一緒に仕事をしていた塚田唯子先生（東京都済生会中央病院血液内科）に相談しました。塚田先生は音大のご出身で、音大卒業後医学部に入学し血液内科医になった先生です。早速、第79回学術集會の音楽監督に彼女を指名し、様々なアドバイスを受けているいろいろなプランを練りました。オープニングセレモニーで演奏していただいたシエナ・ウインド・オーケストラですが、トロンボーン奏者の方が塚田先生の音大の同級生だったことからスムーズにコンタクトを取ることができました。佐渡裕さんが指揮を務めるシエナ・ウインド・オーケストラのような非常に有名なプロのオーケストラによる金管楽器でファンファーレをやっていただければセレモ

ニーが華やかに盛り上がると思えました。一方、会員懇親会ではミニコンサートをやるうと考えたのですが、最初なかなか演奏母体が決まらなくて苦労したんです。塚田先生の患者さんに有名なジャズ評論家の方いらっしゃるということで、その方がジャズトランペッターの日野皓正さんをよくご存知で、では日野さんに依頼してみようという話になりました。そこからは順調に話がうまく進みました(笑)。

小松 なるほど木崎先生の人脈はすごいですね。

木崎 音楽だけでなく、本当にたくさんの方に助けられたと感謝しています。



第 79 回学術集會を振り返って

小松 今回初めての試みとしての SHI (Socio-Hematology Issues) シンポジウムや海外で活躍する若手研究者による Presidential Symposium など、非常に木崎先生らしい多面的から湧き出るアイデアで溺れそうな魅力あるプログラムで、会員の先生方も大変満足されたのではないかと思います。

木崎 今回の学会では会長である自分が打ち出した学術集會のメインテーマを具現化するような学会にしたいと、まず考えました。私が所属する埼玉医科大学で、2016 年から始まった第 4 次長期総合計画のテーマが「飛翔」なんです。学術集會のポスターにも表したんですが、「飛翔」ということで、発展していく、飛んでいくようなイメージの学術集會を作りたいと思い巡らしているときに、「Innovation and Creation」という標語がまず頭に浮かびました。「刷新と創造」です。また、これまで日本血液学会が目指してきた国際化と若手医師・研究者の育成はとても大事な課題だと思いますので、それらを表す「for the Next Generation」を加え、学術集會のテーマは「Innovation and Creation: Advances in Hematology for the Next Generation」としました。これらの想いを学術集會のプログラムに込め、いかに具現化していくか考えました。だから Presidential Symposium では若手 PI として海外で頑張っている先生方に登壇してもらいましたし、教育講演も比較的中堅から若い先生、そして一般病院で頑張っている先生にお願いしたんです。教育講演は一般の教育講演と特別教育講演の二つに分け、一般の教育講演ではここ 1 年の各疾患の進歩、プログレスを話してもらいました。特別教育講演では、基礎的な内容あるいは横断的な内容、あるいは海外の先生にお願いしました。時間も 40~50 分と長く取りました。ご自身の研究成果に関して講演していただき、教育講演ではありますが、

一方通行にならないよう質疑応答の時間も設けました。

小松 演者の先生はどのように決められたのでしょうか。

木崎 論文を読んだり、血液関係の学術集會に参加したりして、名前をよく拝見する先生や心打たれた発表をされた先生にコンタクトしました。そして頑張っているけどまだ次の世代の人。そういう人になるべく登用するように心掛けたつもりです。

小松 木崎先生がポスターに掲げた、我々の重要な任務でもあるこれからの血液学を担う人材をどのように発掘し、どのように育成していくか、会長としての決意は今回のプログラムにしっかり盛り込まれていたと思いますよ。

木崎 この点は学術集會を開催する上でとても大事なことだと思うんですよ。お題目に終わらずに、会長の熱意を込めたメインテーマとそれに合致したプログラムを届ける。誠心誠意取り組んだつもりです。

小松 学術集會を振り返り、ご自分では何点くらいつけられますか。

木崎 合格点はあげられると思うんですよね。まあ 80 点ぐらいはいていると思うんですけど。

小松 100 点でしょう。

木崎 いやいや、もう少し「ああすれば良かったな」と反省する点は思い返せば切りがないですね。

小松 どういう点がこうすれば良かったという部分なんですか。

木崎 プログラムの立て方など、実際やってみて分かることがあります。いろいろ工夫したつもりでも、3 日間の間にあれだけの内容を凝集すると、縦走してプログラムを走らせているため、どうしても聞けないプログラムが必ず出てきます。学術集會そのものを抜本的に変えてもいいかもしれないと思ったこともありました。

小松 具体的なお考えはありますか。

木崎 シンポジウム、教育講演そして会長講演と盛沢山なのは結構なのですが、3 日間の会期中で、ひとりの会長が全てをやるうとすると、どうしても現在のようプログラム構成になります。例えば、年度ごとに血液学会としてあるテーマにフォーカスして開催するのも一つの手かもしれない。学術集會のプログラムには最先端の学問の進歩を反映しているのですが、その反面、会員にとって消化不良になっているような雰囲気を感じました。自分で作っておいてなんですが。

小松 そうですね。6,800 名を超える参加者がそれぞれそれなりのことを求めて学術集會に来るわけですから、全員を満足させる学術集會は不可能ですし、現実的ではない。それはそうですが、今回の企画はいろいろなところに先生の気配りがみられました。

木崎 先ほど触れた SHI シンポジウム。これは僕の造語です。



木崎昌弘先生

学問の進歩にはその周辺領域の問題も孕んできます。そういった社会的背景のある問題を常に意識し、血液臨床医として私は約30年間過ごしてきました。特に臨床医学の場合、研究成果をいかに社会に還元するかということを忘れてはいけないと考え、これまでの学術集会ではテーマとして取り上げられなかった私たち血液臨床医の周囲を取り囲む社会的な問題をシンポジウムの形で4つ提示してみました。緩和医療や終末期医療の問題をはじめ、研究者として我々が直面している研究倫理や研究不正などの問題を含めて臨床研究をどのように進めていくべきか、あるいは今年から始まる新専門医制度に関する問題。それから女性医師のキャリアパス。こういう諸問題を学会として公に扱いたかったんです。

小松 かなりの反響があったと思います。プログラムだけではなく、コングレスバッグへのこだわりも半端なかったですね。

木崎 コングレスバッグには相当こだわりました。

小松 大変好評でした。例えば私の教室のある先生は奥さんから「この色のバッグが欲しい」と指定されたと言っていました。私は家に持ち帰ったとたん、家内に取られました(笑)。

木崎 今回の学術集会で僕が力と情熱を注いだのは音楽とバッグです。毎年学術集会の会場で見かける光景ですが、捨てられてしまうバッグがかわいそうです。もともと僕はカバン好きなのですが、記念になりなおかつ学術集会終了後も使ってもらえるコングレスバッグを、とずっと考えていました。学術集会の準備を始めるに際しての医局でのキックオフミーティングの際、今まで学会に参加して集めたコングレスバッグを全て会議室に並べ、うちの医局員と学会事務局の方々、それからコンベン

ションスタッフの皆でどんなデザインにしようかと話し合いました。そのうちの一つが今回のコングレスバッグの元となった一澤帆布製のコングレスバッグだったんです。僕が4年ぐらい前に参加した日本医学会総会で配布されたんです。そのときは参加者全員ではなく数百個限定でした。たまたま僕はもらった。この一澤帆布のカバンが非常に使い勝手が良くずっと愛用していたこと、そして皆がこのカバンを見て、「これがいい！これで行こう！」ということで満場一致で決まりました。

小松 使えば使うほど味が出てくるというやつですね。

木崎 そうなんです。しかもこの布製バッグは京都の物ですよ。東京で開催する学術集会ですが、京都の品を持ってくるというのが海外からの参加者にも喜んでもらえそうですし、何よりも日本的でいいかなと思ったので、どうしてもこのカバンを作ろうと思うようになりました。そして、一部の人にだけではなく参加者全員に配りたかった。そこで、2017年の4月に一澤帆布の社長にお会いするため京都に出向きました。そこで社長の一澤信三郎さんと奥さまの恵美さんに「学会参加者皆さんに配布したいので6千個作りたい」と頼んだところ、「とんでもない。うちでは天文学的数字です。」と一旦は断られました。一澤帆布のカバンは全て手作りです。「職人さんが70人しかいないので、6千個のかばんを作るといのは相当大変だ」と言われました。けれども、僕のコングレスバッグに掛ける意気込みとコンセプトを説明したところ、一澤さんは「分かりました」と引き受けてくださいました。

小松 職人の方は、毎日徹夜だったのではないですか。

木崎 每晚、夢にこのかばんが出てくると言われました(笑)。2017年9月にうちの医局員が工房に取材に行ったんですよ。そのとき撮った写真です(写真1)。奥様の恵美さんがデザイン担当で、6千個だと持ち手と本体の色を変えればオリジナルのものができるっておっしゃってくれました。持ち手と本体のカラーが異なる6色使って作っていただいたこの学会の特注です。さらに記念になると考え、第79回学術集会のロゴを内側に入れていただきました。こうすれば学会終了後にも使えると考えたんです。

小松 このバッグは大好評でしたね。私はとにかくびっくりしました。家でも「今までの学術集会でもこんなに素敵なバッグを配っていたの？」と聞かれ、「違う違う、今回だけだよ」って(笑)。

木崎 会員懇親会に一澤社長ご夫妻を招待したのですが、「うちのバッグを皆さんが持っている」と、非常に感激してくれました。

小松 これがまずこだわりの一つ目ですね。二つ目は音楽でしょ

うか。

木崎 おっしゃる通りです。第1会場の音楽。あの幕間の音楽を僕の好きな曲にしたんです。僕はベートーベンの交響曲「田園」が大好きなんです。なので、朝は「田園」の第1楽章を流しました。それと、メンデルスゾーンの底抜けに明るい交響曲「イタリア」の第1楽章。この曲も好きなので、「田園」と「イタリア」をずっと第1会場のプログラムの幕間で流しました。「イタリア」に関してはCDを10枚ぐらい購入し聞きこんだ末、会場で流す演奏を決めました。

小松 そういうところまで工夫されたんですね。

木崎 音楽にもこだわりました。それから他の会場では、朝は頭が冴えそうなバロック音楽。そして、昼間はモーツァルト。モーツァルトはあまり邪魔にならずに何気なく聴けそうだったから、選びました。そして最後のクロージングセレモニーの音楽ですね。塚田先生は音大の作曲科を出ているんです。そこでクロージングセレモニーに使う曲をこの学術集会のために作曲してもらえないかと頼んだのですが、さすがに固辞されました。代わりにヴェルディのオペラ、アイダの「凱行進曲」を編曲してくれたんです。塚田先生が「学術集会を終え、学会で得たたくさんの知識を持って自分の施設に凱旋してください」という思いを込めてピアノ連弾用に編曲したものです。アイダ(AIDA)は私の専門とするAPLのレジメンですから、それもあつた。本番では塚田先生の音大の同級生である宮澤幸子さんと連弾で演奏していただいたのですが、この方のお母さんが多発性骨髄腫の患者さんで、もう一も二もなく引き受けてくださいました。学術集会後、宮澤さんからお手紙を頂戴しました。「血液の先生方の前で弾いているのだと思うと胸にこみ



小松則夫先生

上げてくるものがあり、涙が出てきました」と。感謝の気持ちを込めて弾いてくださったみたいです(写真2)。

小松 なるほど。本当に音楽も完璧でしたね。先生の思いは随分伝わったと思います。

木崎 懇親会での日野皓正さんの存在感。一流の人ってすごいですね。目の前であの演奏を味わうことができたのは貴重でした。

小松 私も目の前でずっと聴いてました。なかなか聴けないですね。

木崎 聴けないですよ。本番前にいただいたサインも素晴らし



写真1



写真 2

いんです（写真3）。絵もお描きになるとおっしゃっていました。

小松 ボランティアにも熱心だとか。

木崎 そうです。ザ・レジェンド・チャリティプロアマトーナメント大会の実行委員として活動されています。理解のある方なので血液学会にもこうやって来てくださるんですよ。かっこよかったですなあ。本番直前に控え室に挨拶に伺った際、「何が聴きたいですか」と聞かれ、「黒いオルフェ」が好きだったのでそう言ったら本番で演奏してくれました。最後の「ふるさと」も良かったですし、日野さんのトランペットの音色は心に沁みました。

小松 さすがですね。非常に良かったですね。音色の華やかさに心が癒されました。パワフルかつ繊細に、自由自在に操るテクニック、澄み切った音色、心に響く演奏でした。「ブラボー」ですね。

木崎 じーんときました。この人は偉大な人だと思いましたよ。あの場にいた皆の心をつかみましたよね。素晴らしかったです。

小松 あのトランペットの澄んだ音色というのは凄かったですし、中でも印象深かったのはピアノのところでは何か入れたりして妙なことをしていましたよね。あれもなんかすごいなあと思って。

木崎 後でマネージャーの方から聞いた話ですが、日野さんも非常に気分が良く、ノリノリだったらいいですよ。皆さんがよく聴いてくださったからじゃないですかね。

小松 日野さんの音色が懇親会場に響き渡り、参加者も感動して聴いていましたから、まさに演奏者と聴衆は心が一つになったということでしょうね。

木崎 何よりもこの方の存在感が半端ではなかったですよ。本当に。

小松 日野皓正さんのことは誰もが皆知っていますからね。

木崎 日本のジャズを作った人ですからね。本当にこの人が来てくれたっていうのは大きいですね。

小松 これからの会長はいろいろとやりにくいですよ（笑）。「木崎会長のときはこうでしたよ」と言われるのは辛いです（注：小松先生は2019年に会長をされます）。

木崎 人のつながりは大事だっていうことを改めて思いましたね。人は大事ですよ。だから若い人をいかに育てるか、私たちの責務です。僕が、もう一つ学会で大事だと思ったのは楽しさです。学問的に楽しいっていうのがあるじゃないですか。こんなすごい話が聞けたっていう、そういう楽しさもあると思うし、そうじゃない学会の楽しさをこういうアトラクションに反映しなかったんですよ。だからオープニングセレモニーにも懇親会にもたくさんの方に来て欲しかった。ただ、当日予約なしで懇親会に来られた先生方が結構いらっちゃって入れなかったことが悔やまれますね。会場が規模的に750名が限界だったので、参加できなかった先生方には申し訳なかったです。

小松 懇親会場は歩き回るのも大変なほど、超満員でしたね。

木崎 先ほども触れましたが、若手を育成したいという気持ちから Excellent Case Report (ECR) というセッションを今回初めて試みました。若い先生方は症例報告を演題として出す機会が多いので、トレーニングの場を提供したいと考えました。僕は臨床家だから症例を大切にしたいし、学会におけるポスター発表も大事にしたいと考えていました。その辺りのアレンジをどうしようかと思ったときに、昔よく参加していた米国癌学会 (American Association for Cancer Research, AACR) の学術集会を思い出したんです。Poster Discussion というセッションがあって、ポスターの傍らで、スライドを用いながら口頭で



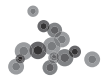
写真 3

発表するというスタイルなんです。これはいいなと思い、評価の高かった優れた Case Report を 20 題集め、ポスターディスカッション形式で、1 セクション 5 題ずつ 4 セクションに分け、司会はシニアの先生にやってもらうという構成にしました。「先生が現役のときの教授回診のような感じで、症例検討してください」と司会の先生方にはお願いしました。司会の先生たちが趣旨を理解してくださり熱心に取りまとめてくださいました。原田実根先生からは事前にセッションの進め方について相談があり、「俺は若い奴は甘やかさず、ピシピシやるから」と言ってくれましたし、澤田賢一先生も、「論文書いてる？」とか発表者の先生方に持ち前のユーモアを交えコミュニケーションを取っていただいたようで感謝です。Excellent Case Report に選ばれた若手の先生方は非常にエンカレッジされたのではないのでしょうか。彼らの今後に期待したいですね。

小松 症例報告はとても大事な情報だと思います。

木崎 はい。できればこういったセッションをこれからの学術集会でも続けてもらえればありがたいなあという思いがありますね。若い人の選ばれた感というのを大事にして。

小松 エンカレッジするのはすごく大事なことですな。



メンターとの出会い

小松 これからは木崎先生の若かりし頃の話をお聞きしたいのですが。

木崎 メンターという言葉があるじゃないですか。「あなたのメンターは誰ですか」と問われれば、私の中のメンターの意味づけは、その人の人生をある程度方向づけた人と考えています。そういう意味で僕のメンターは高校時代の物理の先生だった伊藤明治郎先生と留学先のボスのフィリップ・ケフラー先生（フィルと皆呼んでいます）です。高校生のときに、医学部に行くきっかけとなったのが伊藤先生との出会いです。伊藤先生の物理の授業というのは、アインシュタインの相対性理論を 1 年かけて教えるというものでした。伊藤先生は教え方がとても上手で難しい物理の理論もとても分かりやすく教えてくださいました。また、文学や歴史などにも造詣が深く、科学を人間を中心にした学問として捉えておられました。伊藤先生といろんな話をしているうちに、僕は理系だったので自然科学の中で直接に人間を対象とする医学もいいかなと思ったんです。それで医学部を選んだようなところもあるので、そういう意味では伊藤先生がいなければ僕は医者にはなっていなかったと思います。

小松 1 年間かけて相対性理論学ぶってというのは、具体的にどのような授業だったのですか？

木崎 「電車の中で風景が後ろにいくでしょうって。なぜですか。」って、まずそう言われた。

小松 ほう。

木崎 詳しいことは忘れたけど、その理由は「基本的には相対性理論で証明できるんです」と。教科書は全く使わないので自ら考えなくてはなりません。そのために、結構難しい相対性理論に関する本を読まされました。伊藤明治郎先生は、その後大腸がんで亡くなられたのですが、伊藤明治郎先生の甥っ子が、僕の慶應の後輩で会長シンポジウムに招待した伊藤圭介君なんです。慶應には学生時代に「自主学习」という医学部の学生が研究室に出入りし、1 年間好きな研究ができる制度があり、伊藤圭介君は僕の研究室に初めて来てくれた自主学習の学生でした。彼は非常によくやってくれて、卒業後血液内科に入り、大学院に進学後も僕と一緒にずっと研究してくれた。今は Albert Einstein College of Medicine の PI で、現在は Associate Professor として活躍しています。人生ってこういう人とのつながりが起きるんですね。

小松 すごい話ですねえ。

木崎 ケフラー先生ですが、彼のところに行かなければ今の自分はなかったと思っています。我々が血液を専攻し始めた頃は molecular biology に関する研究を進めることはなかなか難しいことでした。Biology に関する研究しかできなかった。でもあの当時、東大には平井久丸先生がおられて、バリバリと白血病の分子病態に関する仕事をされていました。僕は、ああいう仕事がしたいと思っていました。

小松 そうですね。皆憧れました。

木崎 分子生物学を用いた研究するにはもうアメリカに行くっきゃないと気持ちを固め、留学先を独力で探し、選んだのがフィルのラボでした。今回の会長講演でも留学時代の仕事についてもお話させていただきましたが、フィルのところでもolecular biology を学びながらいろいろな仕事をさせていただきました。その頃彼は、骨髄性白血病細胞の分化誘導機構に非常に興味を持っていて、それが僕のライフワークになりました。1980 年代後半ですが、ちょうどその頃レチノイン酸受容体をはじめとした様々なステロイドホルモン受容体遺伝子がクローニングされていました。

小松 先生は留学されたのは 1990 年前後ですか？

木崎 1988 年から 1991 年にかけてですね。

小松 私は 1990 年から 1991 年なので重なっていますね。

木崎 だいたい似たような頃です。アメリカもいい時代だった。寛容でね。アジアから来た人を育てなきゃいけないというよう

な雰囲気があって。

小松 本当に大事にしてもらいました。

木崎 そう、大事にもらった。僕らの頃の日本の先生はよく働きましたからね。

小松 毎日ディスカッションしたんですか。

木崎 毎日ではなかったけれども、しょっちゅう「Let's talk!」って言うんですよ、彼は。「ラボノート持って来い!」って。

小松 きめ細かに指導してくれたんですね。

木崎 研究に対しては非常に厳しい先生でした。米国ではその当時はすでに週末の土日は休みじゃないですか。あるとき週末にヨセミテに家族と行ったら、フィルが月曜日の朝に「How's your weekend experiment?」って私に聞いてますよ。休んでいると知っていて聞いてますよ、彼は（笑）。当時日本ではできなかった Northern blot を初めてやったときに、RNA がすぐに分解してしまい変なバンドが出たときは、RNA を取り戻してこいというようなこと言われた。要するにもう 1 回すぐにやれということなんだけど。彼はゆっくり話すんですが、とても分かりにくい英語でした。が、何となく皮肉っぽいことを言われたときは不思議なことによく分かるんです。常にこんな具合でした。

小松 私は、メンターのジョン・アダムソンとは 2 週間に 1 回しか会えなかったんですよ。

木崎 偉かったんでしょ。

小松 ニューヨーク血液センターのプレジデントですからね。実験の相談も何もできなかった。だから木崎先生のそういうお話をお聞きするとうらやましいなと思います。

木崎 あの頃フィルは 40 代でまだデニアンじゃなかったんですよ。Professor の資格はお持ちでしたが、大学から給料ももらっていない、自分のグラントだけで生きていた。僕は 3 人目の日本人でしたが、いかに若い人に論文を書かせ発表させるか必死で取り組んでくれました。

小松 70 人ぐらい日本人のお弟子さんがいらっやいますよね。

木崎 そうです。これまでに僕も含めてたくさんの日本人を育ててくれた恩返しをしたいという気持ちがあって、学術集会の 2 日目の夜にケフラーラボの同窓会をしたんです。そのときも 30 人ぐらい集まってくれました。当時一緒に仕事をしたアメリカ人のテクニシャンもこの同窓会のためにボストンから自腹で来日してくれました。少しはフィルに恩返しできたかなという気がしています。2012 年に私が会長を務め、川越で開催した第 3 回日本血液学会国際シンポジウムでもフィルをお招きしました。それから今回も来てくれて。本当に喜んでくれましたよ。彼はよくハリソン・フォードに似ていると言われたりし

て、留学しているとき、息子がフィルのお嬢さんと同じ幼稚園に通っていて、フィルが迎えに行くと、黄色い声上がる。日本人留学生の奥さん方からすごく人気がありましたね。

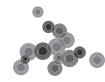
小松 確かにそういう風貌ですね。

木崎 厳しいけどでもとてもいい人なんです。それで慕われるんでしょうね。

小松 そういつながりはいいですね。

木崎 今もシンガポールと UCLA にラボを持ち、行ったり来たりしていますからね。まだまだ第一線の現役です。

小松 すごいですね。それは驚きですね。



血液を志して

小松 学生時代はどの領域に興味があったんですか。

木崎 学生のときは、ジェネラルなお医者さんになりたかった。当時公衆衛生の活動を熱心に行っていたんですよ。新潟の津南という長野県との県境にある冬はとても雪深い町にある無医村地区に定期的に行って予防医学についてフィールドワークを行っていました。地域に根ざした「お医者さん」になりたかった。そんな気持ちからジェネラリストを目指していたんです。卒業後に内科を選択したのも、ジェネラリストになるには内科をまずやらねばならぬと。内科を選んで研修医としていろいろな診療科をローテーションする中で、血液内科で白血病の患者さんを診て「こんな病気があるのか」と驚きました。ATRA がいない時代ですから、抗がん剤で APL の治療をした翌日に脳出血を起こして患者さんが亡くなってしまふ。衝撃的でした。「これはなんとかしなきゃいかん」、さらに「これは病気の仕組みを知らんと治せん」と思った。ただ抗がん剤治療に頼っているのでは駄目だろうと。血液内科に進むことを決めた卒業後 5 年目ぐらいのときです。仕組みを知るには分子生物学を学んで病態を解明するしかないとアメリカに留学しました。日本にいても分子生物学は学べないので、アメリカに早く行こうと考えました。

小松 なぜケフラー先生のところに行くことになったのでしょうか。

木崎 伝手もコネも何もなかったので、Blood とかいろいろなジャーナルをチェックして有名な先生にタイプライターで書いたレターを何十通も送りまくりました。ポジティブな返事の中の一通がフィルからでした。フィルはあの頃、世界で初めて AML の KG-1 細胞を樹立して AML や MDS の仕事を積極的にされていました。僕は学位を MDS に関する研究で取得したの

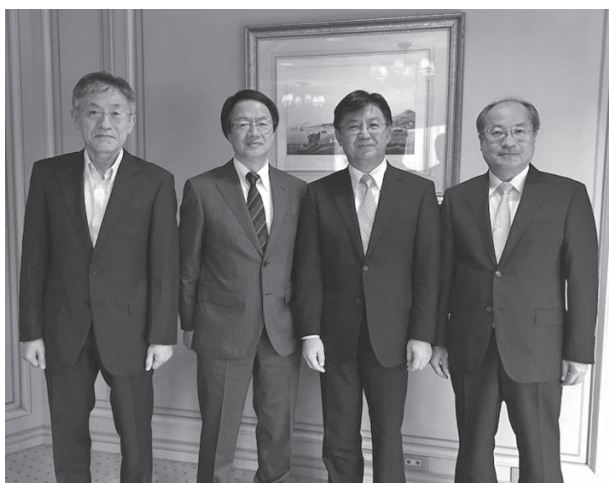


写真 4

で、このラボなら面白そうな研究ができるかもと思って。その返事を頂戴した頃、偶然にも京都でExperimental Hematologyの学会があったんです。そのときにフィルが招待されていたので、インタビューに来てほしいと連絡があったんです。京都で会うなり「ペイは安いけど来るか」って言われました（笑）。

小松 自分でアレンジしたんですか。

木崎 その頃は、面倒見てくれる人が周囲にあまりいなかったんですよ。こういうとちょっと不遜だと受け取れるかもしれませんが、自分の道は自分で切り開いてきたという自負はあります。

小松 そう言い切れるのはすごいですよ。

木崎 そう言われたいために予防線を張ったのですが（笑）。もちろんたくさんの方々にお世話になっております。

小松 私たちが出会ったのはちょうど留学から帰国された頃ですよ。

木崎 そうですね。あの当時、我々の世代の先生が皆、なんとか上に這い上がろうと一生懸命頑張っていました。それが小松先生であり、金倉譲先生であり、片山直之先生。Komatsu・Kizaki・Kanakura・Katayamaの4K。機会を作って皆で集まっては、どうしようって語ったり、研究会したり。

小松 皆留学から戻ってきた時期が同じでしたからね。学会で知り合ってなんだかよく分かんないんだけど皆気が合って、話し合っているうちに「研究会やろうよ」みたいな話になって。

木崎 その研究会がスタートしたのは1996年なんですよ。

小松 始めるまでに3年ぐらいかかった記憶があります。

木崎 そうです。でも楽しかったですよ。あの頃皆で切磋琢磨したのがね。

小松 私の人生にとって大きな財産ですね。

木崎 私も同じですよ。学会でも何でも無い、年1回の研究会のために張り切って準備していました。

小松 頑張ろうとね。皆で自分たちの生データを出して。皆がレベルの高いすごいデータを出してきて、皆でディスカッションしてね。夜は皆で……。

木崎 ワイン（笑）。

小松 研究会のメンバーは次第に増えていき、最終的には12人。その当時は皆助手でしたが10人が教授になりました。

木崎 僕にとってもこのメンバーとの付き合いは非常に大切な財産ですね。私の会長講演の最後には研究会の皆さんの昔の写真が見つからなかったんで、最近撮った4Kの写真で代用しました（写真4）。

小松 気の合う仲間たちと研究会を立ち上げ、皆で切磋琢磨し、時間を共有できたことは財産としか言いようがありません。

木崎 会長講演で、UCLAのケフラーラボで私が初めて行ったNorthern blotの写真（写真5）は、フィルへのスペシャルサンクスの気持ちを込めて載せたのですが、今見ると拙いですね。

小松 私もNorthern blotは飽きるほどやりましたが、Northern blotは難しいですよ。RNAが変性しやすいので、綺麗なバンドが出なくて。

木崎 そうですね。本当に苦労しました。

小松 サンプルに唾液も入ったら駄目だから、マスクを着用して、喋るときも気を付けないといけない。

木崎 あの当時は、学会発表や論文投稿する際にはPCも良いのがなかったから、Figureを作るにしても自分で写真をとって文字などをロットリングしてアートワークするんですよ。それで最後に写真に撮ってスライドにする。本当に大変でした。

小松 いやいや、懐かしいですね。

木崎 オートシークエンサーなんてなかったから、遺伝子の塩基

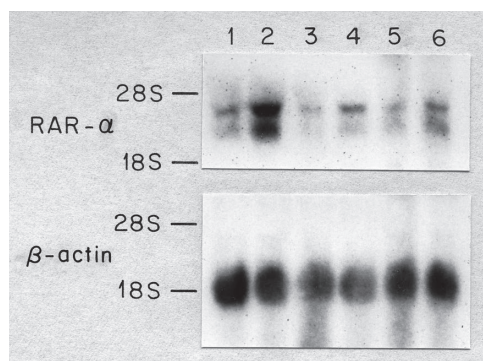


写真 5

配列をみるのも大変でした。

小松 そうそう、2枚のガラスの板の間にゲルを流して、カムを差し込んでサンプルをアプライする場所を作ってね。

木崎 とっても大きなゲル板でしたね。重いし。

小松 ゲル板を洗剤で一生懸命洗ってね。

木崎 僕はMPO遺伝子の異常を検討していたときは、1日で2回ゲルを流していました。夕方からオーバーナイトでゲルを流して、朝ラボに来たらまずそれを解析する。そしてゲル板を洗って、もう1回昼間ゲルを流して解析する。1回ゲルを流してもせいぜい遺伝子の配列は100~200bpしか読めないから一時期はそうして頑張っていたけど、これね、相当にしんどいですよ。

小松 そうですね。フィルムを現像して手作業で読むわけですから。GとかTとかAとかね。現在は自動で読んでくれるんですから。今の若い人たちには想像できない時代でしたね。

木崎 そんなことしている中で、MPO欠損症の患者の遺伝子に異常なバンドを見つけたときは嬉しかったよ。フィルは慎重だから、何度も繰り返すように言われたし、正常人も200例くらい検討させられた。今ならオートシーケンサーで一発なんでしょうが、辛かったけど良い思い出です。

小松 アイソトープを使用するので暗室で作業をするわけですが、赤いランプにフィルムをかざすとバンドが見えるんですよ。おお、何かバンドらしきものが出てるぞーと思って明かりをつけてよく見てみたら目的のバンドと違うんですね。暗室は感動と絶望を同時に味わった場所でした(笑)。

木崎 その当時はラボの片隅でアイソトープを扱っていました。僕は随分とP32を浴びたなあと思います。アメリカも大らかな時代でした。

小松 日本ではうるさかったけれどアメリカでは研究室で普通にアイソトープを使って実験をやっていましたよ。

木崎 これは若いときのフィルの写真です(写真6)。僕が彼のラボでやってきた研究が現在の自分の仕事につながっていると思います。会長講演でも述べましたが、海外への留学はただ行けばいいというものではない。今置かれている環境や立場で本当に精一杯やってから留学する。そして異国異郷の地で試されるのは人間性です。人間力を磨かないといかんと思います。それから大切なことはなんといっても英文論文をひたすら書くことでしょう。

小松 日本語でも英語でも、論文を書いて形にして残さないといけませんね。

木崎 僕は留学するまで英語で論文なんて書いたことがなかったのですが、留学中にフィルのところで行った仕事がBloodに掲載されました。Bloodに自分の名前が出るなんて本当にう

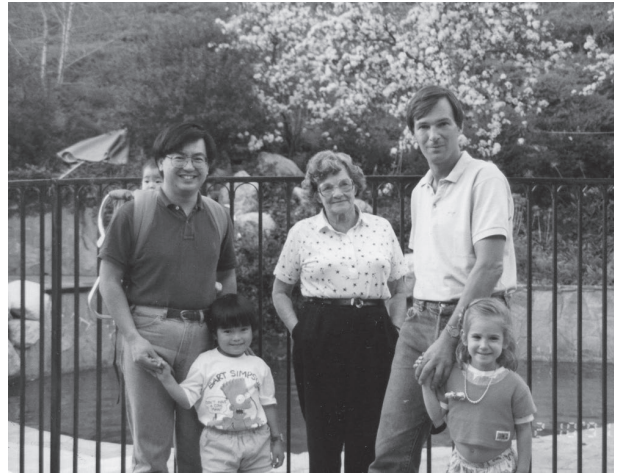


写真6

れしかった。

小松 私の場合、最初に論文が載ったのがBritish Journal of Hematologyでした。嬉しかったですね。これ以上のことは自分にはもうできないな、研究はやめてもいいかなと思ったぐらい。Bloodにアクセプトされるなんて夢のまた夢でした。

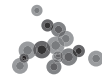
木崎 最初の論文はLeukemia Researchに掲載されました。その次の仕事がBloodに載りました。それから立て続けに3本Bloodに論文が掲載され、本当に嬉しかったですね。フィルは一生懸命に指導してくれるんです。赤いボールペンで添削してくれました。

小松 私、ジョン・アダムソンが英語を直してくれた原稿を今でも大切にしていますよ。

木崎 私もです。

小松 あれは私にとって宝物です。ジョン・アダムソンは文章が非常に上手なんです。今はMicrosoft Wordの機能などを使いますが、昔は手書きできれいに赤字を入れてくれました。

木崎 きれいですよね。僕にとっても宝物ですね。



日本語力

小松 最後に木崎先生のご趣味と座右の銘を教えてください。

木崎 趣味ですか。音楽と読書。僕は活字中毒です。僕には渡辺淳一みたいな作家になるという夢があるんです。

小松 『失楽園』みたいな小説を書くんですか。

木崎 そうそう(笑)。だけど僕の場合は圧倒的な経験不足なの

で書けないですね。

小松 いやいや。

木崎 渡辺淳一の作品では『阿寒に果つ』や『無影燈』も好きです。

小松 『無影燈』も医師を主人公にした作品ですね。心臓移植を扱った『ダブル・ハート』も読みました。

木崎 野口英世の生涯を描いた『遠き落日』は外せませんね。

小松 「野口英世は見えないものを見ていたのである」という。

木崎 僕の教授室には、「忍耐」と書かれた野口英世の色紙が飾ってあります。会津にある野口英世記念館で買いました。

小松 「忍耐」とはいつの頃の野口英世にとっての忍耐なんですかね。

木崎 ロックフェラーにいた頃でしょう。蛇毒の研究をしていたあの頃はまさしく「忍耐」の日々ですよ。

小松 渡辺淳一は男女のこともたくさん書いていますが、『遠き落日』が一番ですね。

木崎 あれは代表作ですね。それからドラマ「白い影」の原作『無影燈』も推します。

小松 骨髄腫の話ですね。あの元 SMAP の中居君が主演した「白い影」ですよ。

木崎 座右の銘と言われると、相田みつをの「一生勉強 一生青春」という言葉が好きです。

小松 それが木崎先生の座右の銘ですか。

木崎 そうですね。気持ちはいつも若く保っていたと思いますね。

小松 それは大事なことです。肉体は老いても気持ちだけはいつまでも若々しく、常に好奇心を持って血液学を追求したいですね。

木崎 最後にこのインタビューが掲載される「臨床血液」についてですが、「臨床血液」は小松先生が編集委員長になって随分よくなりましたよね。様々な企画やコーナーが増えました。そして言うまでもなく日本血液学会の学会誌ですから、若い先生方が症例報告や臨床研究を発表し、ステップアップしていくための登竜門でもあります。今、症例報告を受け入れてくれるジャーナルが、特に英語誌では非常に少なくなってきていますので、「臨床血液」のような雑誌は貴重なんですよ。

小松 ほぼ完成された論文を投稿してくれる先生もいれば、本当にこれ、指導している先生がチェックしているのだろうかと思いを傾けてしまう論文も結構あります。査読者から日本語の拙さを指摘されることもしばしばです。

木崎 英文論文を書けと言いましたが、英文論文を書くにはしっかりとした日本語の文章が書けないと書けないんですよ。いきなり英語の論文は書けない。日本語の論文をきちんと書くとい



木崎先生（左）と小松先生（右）

う訓練を若いうちに積むということが大事です。それが「臨床血液」に求められていることだと思います。今、若い人が論文をなかなか書かないし書けないのは、私は読書をしていないからだと思うんですよ。本を読むという習慣が欠落している。本を読むことで、語彙とか表現力を自然と身に付けることができる。それがきちんとした論文を書く素養になります。日頃から書に親しみ、きちんとした日本語の論文を書いて、そして英文論文を書いていくというステップを踏んでいくことが大切だと思います。

小松 論文というもの日本語で書こうが英語で書こうが、常に論理性を求められるわけです。

木崎 そうです。言語が異なっても、論理的に矛盾の無い構成を作るには、しっかりとした語彙力がないとできない。それを訓練することが大事です。そういう訓練の場になることを「臨床血液」に期待したいですね。

小松 「臨床血液」に積極的に投稿し、査読者からの辛口コメントに挫けず、練習を重ね、そしてまた投稿することですね。

木崎 珍しい症例とか興味深い症例に出会ったらどんどん投稿して欲しいです。自分が症例を経験したときに、「臨床血液」を引っ張り出したら載っていたとか、とても参考になるんですよ。

小松 「臨床血液」を高く評価していただいたところで、終わりたいと思います。本日は長時間にわたりありがとうございました。

【インタビューを終えて】

私と同年の木崎先生ですが、いつまでも若々しくエネルギーに満ち溢れた姿勢に脱帽の一言でした。インタビューの中でも触れたように、若いときに立ち上げた研究会を通じてお互い切磋琢磨して成長してきた仲間ですから、今回のインタビューにはとりわけ感慨深いものがありました。これからもお互い健康には十分に留意し、頑張りましょう！

(小松則夫)